

D.H. ロレンスのフェミニズム*

山田 晶子

序

ロレンス (Lawrence, David Herbert) は1885年に生まれ、1930年に亡くなったが、彼が生きた時代は芸術・文化・学問におけるモダニズムの時代と重なっている。モダニズムの時代は19世紀末から第一次大戦をはさんで1930年頃までを指すと言われている。モダニズムの思潮の先達は、ダーウィン (Darwin, Charles Robert)⁽¹⁾、フロイト (Freud, Sigmund)⁽²⁾、ニーチェ (Nietzsche, Friedrich Wilhelm)⁽³⁾、フレイザー (Frazer, Sir James George)⁽⁴⁾、マルクス (Marx, Karl Heinrich)⁽⁵⁾ 等である。彼らは19世紀的な価値観や既成の概念に一大変革をもたらした。モダニズム運動は、絵画や彫刻、詩や小説に及んでいる。表現主義⁽⁶⁾、キュビズム⁽⁷⁾、シュールレアリズム⁽⁸⁾、ダダイズム⁽⁹⁾、フォービズム⁽¹⁰⁾、ポスト印象派⁽¹¹⁾、未来派⁽¹²⁾ 等がある。

英文学では、モダニズム運動は1920年代前後にピークを迎える。この時代には、大英帝国の衰退、第一次大戦とその後の社会的混乱、産業化・都市化の増大、労働運動の激化、女性の社会進出と参政権運動の拡大、ロシア革命、ファシズムの台頭、キリスト教への懐疑等があった。以上に述べたような大変動は文学にも大きな影響を及ぼし、モダニズム文学

作品における主要な特徴として、既成の価値観への懐疑、人間の内面・無意識の探求、作品の結末がオープンエンディングになっていること等が挙げられる。モダニズムのイギリス作家としては、コンラッド (Conrad, Joseph)⁽¹³⁾、T.S. エリオット (Eliot, Thomas Stearns)⁽¹⁴⁾、フォースター (Forster, Edward Morgan)⁽¹⁵⁾、ジョイス (Joyce, James Augustine Aloysius)⁽¹⁶⁾、ウルフ (Woolf, Virginia)⁽¹⁷⁾ そしてロレンスが挙げられる。

ロレンスはその作品において既成の価値観に反抗したが、主な特徴として、①キリスト教への反発、②従来の男女観への反発、③イギリス階級組織への反発が挙げられる。

D.H. ロレンスのフェミニズムについて論じるに当たり、先ず、イギリスの当時の女性の地位 (18世紀末から20世紀初頭まで) について述べてみよう。最初にイギリスで1928年に成立した完全女性参政権の獲得以前の女性の状態について概略を述べたい。イギリスの女性問題は19世紀に大きく始まったからである。

世界に先駆けて市民革命と産業革命という二大革命を経験したイギリスでは、フェミニズムの理論化がいち早く試みられた。「フェミニズム」という言葉が使われ始めたのは19世紀末のことである⁽¹⁸⁾。イギリスにおけるフェミニズムの歴史は英国の著述家であり女権拡張論者であるメアリ・ウルストンクラフト・ゴドウィン (Godwin, Mary Wollstonecraft)⁽¹⁹⁾ とともに始まると言われている。彼女は、1789年のフランス革命の思想的影響を受けて、1792年に『女性の権利の擁護』(*A Vindication of the Rights of Woman*) を出版した。ウルストンクラフトは、女性が男性を喜ばせる存在として位置づけられていることに反発し (河村貞枝/今井けい 9)⁽²⁰⁾、①男女平等、そのための男女共学の国民機関の設立、②女性の置かれた状態の改善を求める主張を急進的な政治言説と有機的に結びつけ、③女性としての実名を明かしたうえで、「男性的」とも言われるほどの勇猛な

姿勢で理論を展開した。しかし、彼女の主張は非難されて、彼女は、文人ホラス・ウォルポール (Walpole, Horace)⁽²¹⁾ から「哲学を語る蛇」というさげすみの言葉を与えられた。政治的保守派の人々は、身分の差と同じように男女の差も生まれながらに人間に備わった本質的な区別であるとして批判し、彼女を支持する女性たちは「女らしさを失った女性たち」の代表格として悪意をこめて批判された (河村/今井 12-14)。

19世紀に入ると、ジョン・スチュアート・ミル (Mill, John Stuart)⁽²²⁾ と、ハリエット・テイラー (Taylor, Harriet)⁽²³⁾ が女性解放理論を唱えた。女性解放論は、男女平等理論に基づくのか男女差異論から出発するのかという論争に基づいているが、イギリスのフェミニズムは、平等論として始まった (河村/今井 18)。テイラーの死後に、ミルは1869年に彼女の論点を受け継いで『女性の隷従』 (*Subjection of Women*) を出版した。この本で、ミルは男女平等論の基本的理論を展開し、テイラーは女性参政権という政治的・制度改革を通して早急に男女平等を実現しようと提案した。当時のイギリスでは女性を働かせないことが社会的地位のシンボルとみなされていた。しかし、女性たちは結婚すると子供に対する親権を失い、財産権もなかった。離婚の自由もなく夫の支配下に置かれていた。19世紀後半になって、アメリカでの女性参政権運動に刺激されて、テイラーは1851年に「女性参政権」 ('Enfranchisement') という論文を発表した。彼女の夫になったミルは下院議員となってイギリス史上初めて女性参政権の請願を下院に提出した。『女性の隷従』の冒頭で、ミルは「両性間の現在の社会関係を規制している原理——女性が男性に法律上従属するという——は、それ自体不正であるばかりでなく、今や人類の進歩の主要な障害の一つとなっている、したがって、それを完全な平等の原理に置き換えること、すなわち男性には権力や特権を認めず、女性を無能力にしておかないことである」と述べている (河村/今井 22)。キリスト教の下でも、女性は結婚に当たって夫への生涯にわたる服従を誓

約させられ、その誓約は広範囲に適用される。妻は財産権を持たない。「結婚によって夫婦は一人格になる」というイギリスの婚姻法は、妻のものは夫のものという意味であって、夫のものは妻のものという意味ではない。法律が妻に対する夫の権力を保証していることから、妻に対する夫の虐待が発生する。このような夫婦の支配服従関係は、夫と妻の双方の性格を歪めてしまうものであった（河村/今井 27-28）。そして女性は男性によって扶養されなければ生きられないように育てられ、結婚すれば夫に従属して独身時代の権利を失い、結婚をしないで独身でいれば、世間から変わった女という目で偏見を持って見られたのであった。川本静子著の『ガヴァネス—ヴィクトリア朝の余った女たち』⁽²⁴⁾には、「ヴィクトリア朝の家父長制社会において、未婚の女が占める社会的立場は存在しない。夫を持たないかぎり、女に存在理由は認められなかったのである。となれば、若い娘にとっての夫探しが、単なる色恋の問題でないことは自明であろう」（川本静子 112-13）と述べられている。

『女性の隷従』が出版された当初、イギリスの論調は敵意と軽蔑を持ってこれを迎えた。法体系はいかなる部分においても性と年齢の差異を無視することはできないとして反論された（河村/今井 31）。

イギリスでは女性の社会進出及び参政権運動は、ガヴァネスという職業、日本語で言う「住み込み女性家庭教師」の台頭と大きく関わっている。ヴィクトリア朝のイギリスでは、以上に見られたように女性を「家庭の天使」⁽²⁵⁾として、家の中で夫と子供に奉仕することを女性の美德と考えた。19世紀のイギリスでは、中流家庭の女性いわゆるレディと言われる女性は良妻賢母として生きるのが社会的に正しいとされていた。金儲けのために女性が働くのは下品なことである、と考えられていたのである。結婚前は父親に庇護され、結婚してからは夫に守られる、つまり男性に束縛された存在であったのである。18世紀に始まった産業革命の結果、産業化の進展によって職場と家庭が分離され、家庭を活動領域とする中

産階級の女性たちは社会の経済活動とは関わりのない存在であった。

しかし、イギリスでは1849年頃から大量の結婚できない女性が増加した。理由としては①男女の死亡率の相違、②海外移住に関する両性間の相違、③中・上流階級男性の晩婚化の傾向が主な理由として挙げられる⁽²⁶⁾。このような訳で結婚できない中流以上の女性は、生計を得るために働かなくてはならなくなったが、レディとしての体面を保ち、社会からさげすまれないで給料を得られる仕事は住み込み家庭教師であるガヴァネス以外にはなかった。しかしかつてないほど大量の未婚女性がガヴァネスの職を求めた結果、需要と供給のアンバランスが生じて労働条件の悪化が起こった。

18世紀には、上流の娘たちは母親、家庭教師、寄宿学校のいずれかにおいて、あるいはそれらを組み合わせて教育された。ガヴァネスは「家庭的な」環境で女子教育を担う母親の代理を意味していた(川本静子 52)。1840年代から、中流階級の間では『ガヴァネス問題』の解決が課題となっていた。それは、ガヴァネスの供給過多、報酬や労働条件と地位の低下、就業機会の不足と貧困が問題となっていた。ガヴァネスの給料は低くて、年収の平均は20～45ポンドであった⁽²⁷⁾。日本円に換算すると48万円～108万円である。当時パブリックスクールで学んで大学を卒業してチューターになった青年の給料は年収が300ポンド(およそ720万円)を下らなかったもので、ガヴァネスの待遇の低さは理解できる(川本静子 34)。さらに、ガヴァネスになった女性たちは正規の教授法を学んでいた訳ではなかったもので、のちにはガヴァネスのための学校も作られた。

このようなガヴァネスの窮状を救うために4つの大きな動きが起こった。①ガヴァネス互惠教会の設立(1843)、②クィーンズ・コレッジの設立(1848)、③他の職業分野への進出奨励(看護婦、帳簿付け、電報局勤務)、④ガヴァネスの海外移住である。ガヴァネス以外の職業に就くためには高等教育の門戸が開かれなければならないので、ガヴァネス問

題は女性の教育拡大と職業選択の自由を目指す運動に大きく発展していった。かくして、女性の経済的自立を重視した19世紀イギリス・フェミニズムの文脈においては、「ガヴァネス問題」は中流階級女性の職業開拓の必要性の根拠となった。

19世紀の半ばまで、大学と女性は相いれない概念であった。「女性の高等教育」は「女らしさ」からの逸脱を意味していた。イギリスの高等教育運動は、思想的にも歴史的にも、ヴィクトリア時代のフェミニズムと深く結びついている。イギリスでの最初の高等教育カレッジは、1869年に設立され1873年にガートンカレッジと命名されたカレッジと、1871年にマートンホールとして設立され1880年にニューナムカレッジと命名されたカレッジである。両カレッジとも、現在はケンブリッジ大学のカレッジになっている。

さて、ガヴァネスという職業はロレンスの小説にも登場している。第6作目の『アルヴァイナの墮落』(*The Lost Girl*)におけるミス・フロスト(Miss Frost)女史である。彼女は主人公アルヴァイナ・ハフトン(Alvina Houghton)のガヴァネスである。一方、アルヴァイナは一時期助産婦の仕事に携わっていた。また、シャーロット・ブロンテ(Brontë, Charlotte)⁽²⁸⁾の『ジェイン・エア』(*Jane Eyre*)、コナン・ドイル(Sir Doyle, Arthur Conan)⁽²⁹⁾の『ブナ屋敷の謎』('The Adventure of the Copper Beech')のミス・ハンター(Miss Hunter)もガヴァネスであり、ヘンリー・ジェイムズ(James, Henry)⁽³⁰⁾の『ねじの回転』(*Turn of the Screw*)にもガヴァネスが主人公として登場している。

I ロレンスの生い立ちとフェミニズムとの関わり

まず、ロレンスの生い立ちを見てみよう。前述したように、ロレンスは1885年にイギリスのノッティンガムシャー(Nottinghamshire)の北

方のイーストウッド (Eastwood) という当時は炭鉱村であったところに生まれた。ロレンスの母親リディア (Lydia) は敬虔な清教徒⁽³¹⁾ であったため、禁欲的であった。彼女は結婚前には助教師として勤めていたことがあった。教養豊かな女性で、読書を好んだ。また万事に節制を求める厳しい性格であり、自分の夫に対しては、特に官能的な面において厳しい態度で接した。飲酒に対しても夫に対して厳しく接した。一方ロレンスの父親アーサー (Arthur) は、読み書きも不自由なくらいの教養に欠ける炭鉱夫であったが、酒好き、ダンス好きの官能的な生活をこよなく愛する男性であった。7歳のときから炭鉱に入っていた。大人になってからは採炭請負師となって好景気のときには週に5ポンドを妻に渡したが、上役との間がうまくいかなくなって週5シリングに減ってしまったので、夫婦の家計は苦しかった。母親リディアの方が社会的に上の家庭出身であった。二人が結婚して12年間の間にジョージ・アーサー (George Arthur)、ウィリアム・アーネスト (William Ernest)、エミリー (Emily)、「パート」(Bert 当のロレンスの愛称)、エイダ (Ada) の3男2女が生まれた。

このように相対する性格の夫婦の息子として生まれたハーバート・ロレンスは、少年時代は母親の影響を濃く受け母親の期待する男性になろうと努力した。家が貧しかったため、それは社会的に成功することであった。小学校時代から優秀な生徒であった彼は、17歳のときにはイーストウッドの小学校で教員として働いており、18歳になるとイルキストン (Ilkeston)⁽³²⁾ の教員養成所に入った。1906年、21歳になるとノッティンガム・ユニヴァーシティ・カレッジ (現ノッティンガム大学の前身) へ進学して教員免許状を取得し、ロンドン郊外のクロイドン (Croydon) 小学校の教員になったが、病弱な体質であったため (重い肺炎に罹った)、1911年末に退職しなければならなかった。

ロレンスは、母親の性質を受け継いで絵を描いたり読書をしたり詩を

書いたりすることが好きな文学少年であり、母親への愛情は深かった。しかし母親が彼に注ぐ愛情の深さに感謝をする一方で、思春期になると彼はそれを疎ましく思い、また振り切りたいと奮闘しなげなければならない状態に追い込まれた。それは彼の恋愛に母親が干渉する程度がひどかったためである。『息子と恋人』(Sons and Lovers)では、母親と息子の主人公であるポール(Paul)ロレンスがモデル)とポールの恋人のミリアム(Miriam)の三角関係が詳細に描写されている。母親は息子ロレンスを「恋人」のように思っていたのである。これは一面においては精神分析学で言われるエディプス・コンプレックス⁽³³⁾の状態である(肉体的に母親を求めたわけではなかった)。ロレンスは、母親の影響もあってミリアムのモデルとなった女性である初恋の人ジェシー・チェインバーズ(Chambers, Jessie)⁽³⁴⁾と破局を迎えた後、自分にふさわしい女性を求めて大勢の女性と関係を持った。

ジェシー・チェインバーズは、ロレンスの文学における成長に大きく影響を与えた女性である。彼女とロレンスは様々な文学作品や教養書を共に読んで議論し合った。彼がジェシーに初めて会ったのは15歳の時で、ジェシーの住むハグズ農場においてであった。彼は22歳の時に人妻のアリス・ダックス(Dax, Alice)と性的な関わりを持った後、クロイドン小学校の同僚の助教員アグネス・ホウルト(Holt, Agnes)とも交際したが、1909年のクリスマスまでには2人の仲は終わる。一方で別の小学校に勤めていたヘレン・コーク(Corke, Helen)とも親しく交際した。その後、1910年12月に別の小学校の教員であったルイ・バローズ(Burrows, Louisa)に求婚したが(彼女とは18歳から交際していた)、1912年2月には婚約を解消した。1910年12月9日に母親リディアが亡くなった。若いロレンスは母親が生きていた間は性に関する表現をいっさい禁じられていたのだが、母親の死によってその影響から解放され、文学の才能が大きく開花していった。

次にロレンスと女性参政権運動⁽³⁵⁾との関わりについて述べよう。イギリスではガヴァネス問題が生じて、19世紀末から婦人参政権運動が始まった。そして1904年から1914年にかけて婦人参政権運動は最も活発になった。1918年には部分的な婦人参政権が認められ、1928年に完全な婦人参政権が承認された。ロレンスの故郷のあるノッティンガム州は婦人参政権運動の拠点となっていた。というのも大勢の男女の労働者がノッティンガム市に集まっていたからである。男性は工場労働者であり、女性はレース工場で、また家庭でレースに関わる仕事をした。エメリン・パンクハースト (Pankhurst, Emmeline Goulden (Emily))⁽³⁶⁾に指導されて、ノッティンガムで、女性の権利拡大集会がたびたび開催された。彼が交際したジェシー・チェインバース、ルウーイ・パローズ、アリス・ダックスは女性が自立することに関心を抱いていた。特に、サリー・ホプキン (Hopkin, Sallie) とアリス・ダックスは婦人参政権論者であった。またロレンスは、ロンドン郊外のクロイドン小学校で教えていた時の1911年7月14日に開催された女性参政権運動のデモ行進を見に来るようと、ルイズ・パローズ (Burrows, Louisa) に手紙を送っている。更に、個人的にロレンスが付き合っていたわけではないが、その頃文通して自分の著作への意見を求めていたブランチ・メイ・ラスト・ジェニングズ (Jennings, Blanche May) は社会主義者であり、婦人参政権獲得運動に取り組んでいた。彼女は郵便局に勤め、1941年リヴァプールのリース通りの郵便局長になり一生独身であった。ロレンスは彼女に宛てた手紙において、自分は人生に対しても男性に対しても、受け身的な女性よりも積極的な女性の方に魅力を感じていると書いている⁽³⁷⁾。ロレンスは、編集者エドワード・ガーネット (Garnet, Edward)⁽³⁸⁾宛の手紙の中で、『虹』のテーマについて「女が個人になり、自己に責任を持ち、女性としてのイニシヤチブを取り始めること」⁽³⁹⁾であると言っていることから分かるように、女性を男性と対等の存在であると認めたい考えを

持っていた。しかし当時の社会全体においては、男性は積極的・行動的な女性よりも受け身的な女性を好んでいた。ロレンスはそういう社会の風潮にあつて異質な存在であつたと言えるし、女性の理解者であつたと言えるであろう。彼の作品には、教員や芸術家や助産婦や婦人参政権運動家や考古学者や農業従事者などの職業婦人が主人公として登場しているので、活動的な女性が彼を引き付けたと言える。

さて、彼が生まれつき病弱であつたということは（生まれたての頃重い肺炎に罹つて死にかけたのだが、母親の献身的な介護により生き延びた）、彼に大きな転機をもたらす。クロイドン小学校を病気のために退職した後、ノッティンガム・ユニヴァーシティ・カレッジの恩師であつたウィークリー教授（Professor Weekly, Ernest）⁽⁴⁰⁾の家へ今後の就職のことで相談に行ったときに、教授の妻であつた3人の子持ち（一男二女）のフリーダ（Lawrence, Frieda）⁽⁴¹⁾という女性と知り合い、2人は熱烈に愛し合うようになったのである。フリーダはドイツ人貴族（フォン・リヒトホーヘン男爵）の娘であり、1912年5月には2人はドイツへ駆け落ちをしたのである。このときロレンスは26歳であり、フリーダは彼よりも6歳年上であつた。世間の非難を浴びながらも2人は愛を貫き、1914年7月に結婚する。しかし最初は熱い関係であつたロレンスとフリーダも、フリーダが捨ててきた子供に執着してロレンスを苦しめたり互いに不倫をすることがあり、よく喧嘩をしたと言われる。しかしロレンスは死ぬまで離婚することはなく死ぬまでフリーダを最愛の女性として敬つた。

II 「白い」女性

母親が清教徒であつて、父親を抑圧していた様子を幼い頃から見ているロレンスは、大人になってからは小さい頃は嫌つていた父親の長所を

知ることになる。それは自分が女性によって苦しめられるようになったためである。

当時のイギリス社会では、キリスト教会は教育の仕事も引き受けていた。キリスト教会が日曜学校で子供たちにキリスト教の教義と思想を教えたのである。イーストウッドの教会で、ロレンスは非国教会会衆派（または組合派）(Congregationalism)⁽⁴²⁾ 教会で教えを受けた。ロレンスにとっては、キリスト教の教えは反発を覚えるものであった。一つには、それが性的に人間を枠にはめるものであったし、また一つにはキリスト教が人間至上主義で自然界を征服することを目的にした結果、行き過ぎてしまったと考えたためである。つまり、機械文明信奉の結果、人間性が歪められたと思ったためである。キリスト教では人間の肉体よりも精神性に重点が置かれているが、これが人間を不幸にしていると彼は考えたのである。

そして母親を原点として、ロレンスにはまず女性こそがキリスト教の精神を男性に押し付ける存在として考えられたのである。このような女性を彼は「白い」女性として、特に初期の小説で描いている（『白孔雀』(The White Peacock) のレティ (Lettie) とクリスタベル (Crystabel)、『不倫』(The Trespasser) のヘレナ (Helena)、『息子と恋人』のガートルード (Girtrude) とミリアム (Miriam)、『恋する女たち』(Women in Love) のグッドルーン (Gudrun) とハーマイオニー (Hermionie)、『アルヴァイナの墮落』(The Lost Girl) のミス・フロスト (Miss Frost)、『羽鱗の蛇』(The Plumed Serpent) のカルロータ (Carlota) 等)。キリスト教は性を抑圧する傾向が強く、女性が性を罪悪視するために、性交においてロレンスは女性から十分に満足を得られなかったことに苦しんだのである。

The violinist was a girl of twenty-eight. Her white dress, high

waisted, swung as she forced the rhythm, determinedly swaying to the time as if the body were the white stroke of a metronome. ... Her neck, pure white, arched in strength from the fine hollow between her shoulders, as she held the violin. The long white race of her sleeve swung, floated after the bow. (T 42)⁽⁴³⁾

ヴァイオリン奏者は28歳の女性であった。彼女は、自分の体が白いメトロノームでもあるかのように、断固として、リズムに合わせて体を揺らして音楽を無理矢理作っていたので、ウェストの位置の高い白い服が揺れた。その姿を見ると若者は眉をしかめた。しかし彼は眺め続けた。彼女は力強い丈夫な肉体を持っていた。真っ白な首は、肩の間の美しい窪みから、きれいな弓形を作っていた。長くて白いレースの袖が揺れ、弓の動きについて回った。

上述の引用に見られるように、ヘレナは「白い服」を着ており、「真っ白な首」を持っていると書かれているように、外観が白く描かれている。ロレンスは精神性が強くて性を罪悪視する女性たちをこのように外観が白い人間として描くことが多い。女性側が性を罪悪視すれば、彼もまた自分が罪を犯しているように感じたのである。また一方で官能的な女性とも関わるが、このような女性には今度は精神性が欠けていることを不満に思うのであった。ロレンスは、最終的には男女の関係においては精神と肉体の均衡を求めたのであるが、初期の作品ではキリスト教を信奉する精神的な「白い」女性から離れることが必要であると考えた。しかし中・後期の作品では「白い」特質を持った登場人物には男性も存在する。『恋する女たち』のジェラルド (Gerald) や『チャタレー卿夫人の恋人』(Lady Chatterley's Lover) のクリフォード (Clifford)、『処女とジプシー』(The Virgin and the Gipsy) のイヴェット (Yvette) の父親等である。

次の白い男性の描写を見てみよう。次の描写は『恋する女たち』の主人公の一人であるジェラルドの描写である。

Gudrun lighted on him at once. There was something northern about him that magnetized her. In his clear northern flesh and his fair hair was a glisten like cold sunshine refracted through crystals of ice. And he looked so new, unbroached, pure as arctic thing. (WL 14)⁽⁴⁴⁾

グッドルーンはすぐに彼に目を留めた。彼には彼女を魅了する北方的なものが備わっていたのだ。彼の透明な白い肌と金髪には、氷の結晶を通して屈折した冷たい太陽光線のようなきらめきがあった。彼は北極に生きるもののように、新しく、手を付けられていず、純粹に見えた。

ジェラルドも、また、「白い肌と金髪」を持ち、北方的であることが強調されている。彼は、クリフォードと同様に機械文明の王者として描かれるが、最終的には滅びる運命であり、強い精神性と合理性が特質である人間が作者によって批判されている。

Ⅲ 「黒い」男性

さて、白い女性に苦しめられる男性の中で、彼女の影響を逃れ、女性を本来の姿に戻そうと、あるいは導こうとして活躍するのがロレンスの作品のヒーローたちであり、彼らは「黒い」男性として登場している。『処女とジブシー』に登場するジョー・ボズエル (Joe Boswell) というジブシーの描写を見てみよう。

Yvette's heart gave a jump. The man on the cart was a gypsy, one of the black, loose-bodied, handsome sort. He remained seated on his cart, turning round and gazing at the occupants of the motor-car, from under the brim of his cap. And his pose was loose, his gaze insolent in its difference. He had a thin black moustache under his thin, straight nose, and a big handkerchief of red and yellow tied round his neck. (GSNSL 1040)⁽⁴⁵⁾

イヴェットの心臓は飛び上がった。幌馬車に乗っていた男性はジブシーで、だぶつとした服を着ており、色が黒くてハンサムなタイプであった。彼は、幌馬車の座席に腰かけて、頭を回して自動車に乗っている者たちを帽子の縁の下から凝視していた。彼はくつろいだ格好であり、その視線は、自分とは住む世界が違う者たちだ、という意味を示していて傲慢であった。彼はほっそりした真っ直ぐな鼻の下にわずかな黒い口髭をたくわえ、そして首の周りには赤と黄色のハンカチーフを巻いていた。

上述のジブシーは、色が黒いのであるが、外観が黒く更にその黒さは彼の内面が既成の価値観とは異質であることを示すために用いられている。それゆえに、彼は「自分たちとは住む世界が違う者たち」とイヴェットたちを見つめているし、自分に自信をもっているので傲慢な態度を見せている。

この黒さは、ロレンスの父親が炭鉱夫として坑内で真っ黒になって働く姿が原点になっていると思われる。また、ロレンスは夜の闇に魅かれた。この闇は官能性（性愛）と関係を持っている。しかし「黒い」男性たちは初期の作品では「白い」女性たちに負けてしまい、アルコール中毒になったり（『白孔雀』のジョージ (George) やアナブル (Anable)）自殺し

たりするのである（『不倫』のシーグマンド (Siegmond)）。

ロレンスの闇への傾倒は、第3作目の長編小説である『息子と恋人』から顕著になってきて、闇は『虹』(The Rainbow)、『恋する女たち』以降、彼の独自の思想を示すキーワードになっている。「闇」は、キリスト教では「光」に対立するもので、キリスト教では「混沌」、「死」、「悪」、「不幸」等のマイナスの意味を持っている。「闇」は悪なるものとして「光」によって征服されるべきものであると考えられている。ヨーロッパの文明国は、未知の大陸の「闇」を征服しようとする帝国主義の下に、「正義」、「博愛」、「進歩」、「教化」等の大義名分を抱いてそこへ侵略していったのであるが（文学作品に表れた例『闇の奥』(Heart of Darkness)）、実際は、植民地として原住民を搾取したのである。ロレンスはその作品において「闇」の善性を唱えた作家であり、この点が彼の大きな特質なのである。「光」の上位から「闇」の上位へという価値観の転換を求めたのである。

性愛に関しては、19世紀のみならずキリスト教では中世から現代にいたるまで、女性が性的に積極的であることを女性のマイナスの要素であると教えてきた。そして19世紀のイギリスは特に偽善的な社会であり、中・上流階級の女性はセックスにおいては「自ら欲望しない」ことが美德であると教えられており、日常生活では、彼女たちは「家庭の天使」であることを求められた。

ロレンスの母親だけでなく、キリスト教に熱心な女性たちは性を嫌悪していたのである。ロレンスはこのように清教徒の母親に手厚く育てられたので、彼女の影響は計り知れないものがあつた。しかし母親もロレンスの恋人であつたジェシーもセックスを嫌悪する一方で彼への所有欲が強く、彼を誰にも渡したくないという思いと自分の思うように支配したいと気持ちが強かつたのである。このような支配欲の強い女性をロレンスは「マグナ・メイタ」⁽⁴⁶⁾と呼んだ。

「大いなる母」と名付けた「白い」女性たちをロレンスは心底から嫌悪

したのであるが、一方で彼にとって女性は何よりも必要な存在であった。彼が求めた女性像は『恋する女たち』のアーシュラ (Ursula) や『アルヴァイナの墮落』のアルヴァイナや『チャタレー卿夫人の恋人』のコニー (Connie) などである。しかし彼女たちは最初は男性にとって望ましい存在として登場していない。彼女たちを男性にとって望ましい存在にするために、「闇」の善なる性質を備えた男性たち、つまり「黒い」男性が登場する。

「黒い」男たちは、「闇」を統括する「黒い神」の擬人化と言える。「黒い」男たちの特徴は、①下層階級の出身である、②異教神話に登場する妖精の男に似た風貌を備えていたり、③社会にとっての「異端者」である。そして「黒い」イメージを帯びている。『チャタレー卿夫人の恋人』の主人公であるメラーズ (Mellors) のように、一見して病弱そうでもよく見ると血色が良くて生命力に溢れている。また人種的にはメキシコ人やインディアンやジプシーが多く職業的には下層階級の出身で炭鉱夫や鍛冶屋や農夫などである。中には知的な男性も「黒い男」として登場している。『恋する女たち』のバーキン (Birkin) や『羽鱗の蛇』のドン・ラモン (Don Ramon)、ドン・シプリアーノ (Don Sipriano) 等である。

『恋する女たち』では、教養があつて社会的地位もある中流階級出身の主人公バーキン (Birkin) という男性は、支配欲が強い貴族の女性ハーマイオニーとの関係を断ち切って、アーシュラという小学校の教員をしている女性と新たな関係を築いていく努力をする。アーシュラも最初はマグナ・メイタと呼ばれる支配欲が強い女性であったが、バーキンは彼女の女性らしい本質を見ぬいて「星の均衡」という思想を説くうちに、彼女は徐々に彼に感化されて本来の女性の特徴を取り戻し、2人は「善なる闇」を体験するのである。このように女性を導いていくバーキンは黒い男性として描かれている。

“Where are we going then—to the Mill?”

“If you like. —Pity to go anywhere on this good dark night. Pity to come out of it, really. Pity we can’t stop in the good darkness. It is better than anything ever would be—this good immediate darkness.”
(WL 317-18)

「それじゃどこへ行くの？ 水車小屋？」

「君がそれを望むなら。——この善なる闇夜にどこかへ行くなんて残念だ。全く、この夜から出てしまうのは残念。この善なる夜の中に留まっていられないのは残念だ。これ以上に良いところがあるものか——このナマで触れられる以上の良いものが。」

主人公の一人でありロレンスの代弁者と考えられるパーキンは異教徒のエジプトのファラオにたとえられており、彼は闇を善なるものとして捉え、闇をキリスト教の白い光に対抗するものとして提示している。『恋する女たち』のこの場面より以前に、パーキンは「星の均衡」という男女の関係アー修羅に説明しているが、これはロレンスの男女観を示すものである。パーキンは次のように述べる。

One must commit oneself to a conjunction with the other—for ever. But it is not selfless—it is a maintaining of the self in mystic way and integrity—like a star balanced with another star.
(WL 152)

人は自らを他者とのある結合関係にゆだねなければならない——永遠に。しかしそれは自我を失うということではない——それは自身を神秘的で完璧な形で維持することなんだ——星が他の一つの星と

均衡を保っているように。

「星の均衡」とは、男性は純粋な男の極となり、女性は純粋な女の極となって対置され、均衡を保つという思想である。このとき男性も女性も没我的 (impersonal) かつただ一つの個 (individuality) を得ており、相手を支配したり服従したりすることのない自由な立場を得る。“impersonal you” と “impersonal me” は単一であることにより自発性を確立できる存在である。単一性とは「シングルネス」であり自意識、古い観念の放棄を意味する。そのとき義務はなくなり自発性に従って人は行動するのである。またロレンスは「共にある自由」や「愛する2人は合一することはない、2人は2人のまま」とも述べている。

「黒い」男性たちは性愛を重視するが、それは男性側が一方的に快楽を覚える関係ではなくて、快楽を知らない女性にセックスの喜びを教えるという、女性に「やさしい」(tender) 男性像なのである。このような登場人物を男性の主人公とし、彼らに、美貌で社会的地位が高い女性たちを彼女たちの夫たちから奪わせたり、その社会的環境から救い出させたりすることで、ロレンスはヨーロッパの既成の価値観に対抗したのである。彼が対抗したのは、とりもなおさずキリスト教価値観を持った中・上流社会であった。ここにロレンスの階級に対する反抗が表れている。

一番顕著な例が『チャタレー卿夫人の恋人』である。准男爵夫人⁽⁴⁷⁾ の20代のコニーは、夫のクリフォード (30歳前後) が戦争によって受けた怪我で下半身が麻痺し性的不能状態になってしまった影響で、肉体的苦痛のみならず精神的苦痛にも見舞われ、かなりひどい神経衰弱状態に陥る。2人が住んでいるラグビー邸が所有する広い森が屋敷に隣接しているが、コニーはその森の世話をしている森番 (gamekeeper) のメラーズと出会う。メラーズは以前は炭鉱の鍛冶屋をしていたし、戦争に出かけた

ことがあったが、身分が低い男であり下層階級に属している（38, 9歳）。准男爵（Baronet, 法的には貴族ではないが地主の最上位に位置する位なので、実質的には貴族と考えてもよい）の令夫人が夫の雇われ人であり労働者であるメラーズに魅かれて森でセックスを繰り返す、彼女は妊娠して最後にはメラーズとの関係が夫にばれてしまうが、離婚を拒否する夫に逆らって、彼女はメラーズを選んでラグビー邸を出る。コニーを理想の性愛に導くメラーズは、常に黒っぽい服装をしていて毛髪も黒く、しかし教養がある男性というタイプである。つまり黒い男性である。彼は異教の神であるパン神⁽⁴⁸⁾を信仰しているのである。二人の性交場面は、また、「闇」と関連付けられている。

このように、身分が高い女性を身分が低い男性が奪うという内容は、メラーズとコニーのセックス場面の描写に対して中・上流階級からの反発も原因となって、イギリスでも裁判となって、1928年の出版当時は削除版しか出されていなかった。セックス描写が反発を買ったのは、表現に四文字語（fuck, cunt, piss, shit）が出ているためばかりではなくて、それが反キリスト教的であるということも理由であったと現在では言われている（肛門性愛が描かれているという点）。しかし1959年の法律改正⁽⁴⁹⁾によってイギリスでは1960年に無削除版が出版できるようになった。日本でも昭和32年（1957年）には完全な翻訳書が有罪判決を受けたが、その後1997年に新潮社から再び完全版の翻訳が出ており、今では何も問題にはならない。

さて時間を遡って、1919年11月にロレンスと妻のフリーダはイギリスを去って、その後二度と再び彼は祖国に永住することはなかった（一時的には戻ったことがある）。第一次大戦という悪夢は、並はずれて感受性が強かったロレンスに想像を絶する過酷な影響を及ぼしたのである。身体が弱くて兵役を免除された彼であったが、ドイツ人の妻を娶っているという理由や、大衆から孤立して生活している等の理由から、大戦中

にコーンウォールに滞在していたときにはスパイ容疑で様々な嫌がらせを受け、死の恐怖を味わい、徴兵検査においてはこれ以上ないほどの屈辱を受けた。このことは『カンガルー』に詳細に描かれている。このときの忌まわしい思いがイギリスというキリスト教民主主義の国に対して、彼に憎悪と嫌悪を抱かせて、祖国が標榜する博愛、平等、自由等の理想がいかに嘘と偽りに満ちているかを思い知ったのである。

かくしてロレンスは、当時のキリスト教会と戦い続けてきたのであり、彼の「闇」及び「黒い神」はその思想を表す中心的な用語なのである。また、ロレンスは男と女の対立を描いているが、彼は両者の調和と均衡を望んでいるのであり、「白い」世界から「黒い」世界への移行をテーマとして書いた後では、『死んだ男』に見られるように、両者つまりキリスト教と異教を調和させようと願っていたのである。

ロレンスのユニークなフェミニズム：まとめとして

1970年代になって文学においてフェミニズム批評が盛んになった。ロレンスの作品も、フェミニズム批評の対象になり、痛烈なバッシングを受けてきた。なぜなら、彼の男女観にはセックスの問題が関わっているのだが、最後の長編小説である『チャタレー卿夫人の恋人』における主人公メラーズとコニーのセックスの場面で、女性が男性に従属しているので女性を侮蔑しているという意見が、フェミニズム批評を唱道する女性たちから湧き上がったからである。

しかし筆者は『チャタレー卿夫人の恋人』には、女性の真のあり方が描かれているという点で、女性蔑視や男性優位という思想とは異なった思想が表れていると捉えて、この小説を支持している。つまり、メラーズがコニーに示す優しさの思想は、本当に女性を理解している男性ゆえに生じていると考えるのである。それでロレンスには前述した「星の均

衡」のような独自のフェミニズムが存在すると考えるのである。

ロレンスと言えば、機械文明を嫌悪した人間として有名である。彼は人間の本能や無意識を重視し強調した作家と言える。この主題は、作品に植物や動物がおびただしく登場し、それらと人間とのかかわりが描かれていることからうかがえる。例を引用してみよう。次はコニーがメラーズと関わることによって、自然との交感を取り戻した場面の描写である。

She was like a forest, like the dark interlacing of the oakwood,
humming inaudibly with myriad unfolding buds. (LCL 138)⁽⁵⁰⁾

彼女は森のようなものだった、無数のつぼみを開いてゆくとき耳に聞こえなくハミングを口ずさむ暗く繁った檜の木のようにであった。

次の引用は『馬で去った女』(*The Woman Who Rode Away*)からの引用である。

This at length became the only state of consciousness she really recognized: this sense of bleeding out into the higher beauty and harmony of things. Then she could actually hear the great stars in heaven, which she saw through her door, speaking from their motion and brightness, saying things perfectly to the cosmos, as they trod in perfect ripples, like bells on the flower of heaven, passing one another and grouping in the timeless dance, with the spaces of dark between. (GSNS 779-80)⁽⁵¹⁾

これは、彼女が本当に認知した唯一の意識の状態であった。より高

度な美と事物の調和の中へ溶け出して言っているという感覚が。そのとき彼女は現実には天上にいる大きな星たちの音を聞くことができたのだが、彼らをドアの隙間から見ることができ、彼らは動きや輝きによって彼女に語りかけ、完璧なさざ波を立てて歩み、完璧に宇宙に向かって何かを言っていた。天上の花につけられて鐘のように互いを通り過ぎながら、そして終わりのない踊りを踊って、間には闇の広がり置いて、集合していた。

上の引用では、女性と星々や宇宙との交感が鮮明に描かれている。このような宇宙とのつながりこそ、ロレンスが『チャタレー脚夫人の恋人』についてにおいて解説している内容である。

精神性は理知と関係し、更に科学文明や機械文明へとつながってゆく。この文明の基にあるのがキリスト教の思想である。ロレンスはキリスト教を激しくバッシングした。それは機械文明の発達が、今日の我々の生きている状況を見れば一目瞭然のように、弊害をもたらしたからである。人間と自然の分裂が人間を不幸にしてしまった。それゆえに彼は「闇」(人間の動物性、無意識)の重要性を唱えたのである。「闇」はロレンス独自の「セックス」の主題と結びついて、彼の思想の根幹をなしている。そして彼は、「光」の行き過ぎが現代社会に弊害をもたらしているため、「闇」を復権させようと考えた。女性原理である「光」と男性原理である「闇」の均衡が、ロレンスの求めるフェミニズムの思想である。

以上に述べてきたように、ロレンスの主題の新しさは、彼が生きていた時代以上に21世紀の今、重要になっている。彼は世界的に重要な作家として、詩人として、批評家として今後も永久に読み継がれていくであろう。

* 本論文は、2012年12月8日に開催された講演、「シリーズ 文学に描かれた

人間と愛—D.H. ロレンスの闇の思想と男女観（一般社団法人 大学女性協会愛知支部主催）を修正したものである。

注

- (1) ダーウィン (Darwin, Charles Robert 1809–82), イギリスの博物学者で、生物進化の確固とした理論の創始者。『種の起源』出版 (1859年)。
- (2) フロイト (Freud, Sigmund 1856–1939), オーストリアの意志で精神分析の創始者。『日常生活の精神病理』(1904年)。
- (3) ニーチェ (Nietzsche, Friedrich Wilhelm 1844–1900), ドイツの哲学者、詩人。『悲劇の誕生』(1872年), 『ツアラトウストラはかく語りき』(1883–91)。
- (4) フレイザー (Frazer, Sir James George 1854–1941), スコットランド出身の人類学者、民俗学者、古典学者。『金枝篇』(1890年)
- (5) マルクス (Marx, Karl Heinrich 1818–83), ドイツの社会学者、政治理論家。フリードリッヒ・エンゲルスとともに世界的共産主義の設立者。『共産党宣言』(1848年), 『資本論全三巻』(1867, 1885, 1894年)
- (6) 表現主義: 主としてドイツにおける20世紀初頭の芸術運動。反ブルジョア的。反自然主義。ストリンド・パーク, カフカ (作家)。映画『カリガリ博士』, 音楽 A. シェーンベルク。
- (7) キュービズム: ピカソ (1881–1973), ブラック (1882–1963)。絵画は自分の主観を表現するものという主張。絵画は三次元のいるージョンではなく平面化された形態の芸術という説。
- (8) シュールレアリズム: 詩人ブルトン (1896–1966)。「純粹に心理的なオートマティスム (自動記述法)」と定義。シュールレアリスムの文学は意識による統制を享けずに書かれることによって初めて成し遂げられるもの。画家キリコ (1888–1978), ジョアン・ミロ (1893–1983), エルンスト (1891–1976)。
- (9) ダダイズム: 本質的に芸術と政治の伝統の両者への攻撃。アルザスの画家ジャン・(ハンス)・アルプ (1887–1966), ニューヨークのデュシャン (1887–1968)。
- (10) フォービズム: 色彩とフォルムから完全に解放して自立性をもたせる。マティス (1869–1954), ゴーガン (1848–1903)。
- (11) ポスト印象派: ゴッホ (Gogh, Vincent Van 1853–90) マネ, ゴーガン,

- セザンヌ、スーラ、マチス、ピカソ。ロジャー・フライが名付けた。
- (12) 未来派：F. マリネッティ (1876-1944)。唯物論的な美。ポッチョーニ (1882-1916)。人間を機械化する。
- (13) コンラッド：(Conrad, Joseph 1857-1924)。ポーランド生まれの英国の小説家。*Heart of Darkness* (1899), *Nostromo* (1904)。
- (14) T.S. エリオット (Eliot, Thomas Stearns 1888-1965)。米国生まれの英国の詩人・批評家・劇作家。ノーベル文学賞を1948年に受賞。*The Waste Land* (1922), *The Cocktail Party* (1950)。
- (15) フォースター (Forster, Edward Morgan 1879-1970)。英国の小説家・批評家。*A Passage to India* (1924), *Aspects of the Novel* (1927)。
- (16) ジョイス (Joyce, James Augustine Aloysius 1882-1941)。Dubliners (1914), *Ulysses* (1922), *Finnegans Wake* (1939)。アイルランド生まれの小説家。
- (17) ヴァージニア・ウルフ (Woolf, Virginia 1882-1941)。英国の女流小説家、批評家。代表作品として *Mrs. Dalloway* (1925), *To the Light House* (1927) がある。
- (18) フェミニズムという言葉：1880年代に「女性」を意味するフランス語の「ファム」に、社会運動ないしは政治的イデオロギーを意味する「イスム」が結び付けられて「フェミニズム」という用語ができた。1890年代にはヨーロッパ諸国に広がった。1910年代までには北アメリカと南アメリカにも広がった。(エステル・フリードマン著、安川悦子・西山恵美訳『フェミニズムの歴史と女性の未来——後戻りさせない——』(明石書店、2005年)、28-29頁)。
- (19) メアリ・ウルストンクラフト・ゴドウィン (Godwin, Mary Wollstonecraft 1759-97) の娘が、『フランケンシュタイン』(*Frankenstein* 1818) の作者として有名なメアリ・シェリー (Shelly, Mary) である。ちなみに、イギリスで18世紀に広まった「ブルーストッキング」(bluestocking) という言葉は18世紀のサロンの名称であり、エリザベス・モンタギュー (Elizabeth Montagu) (1720-1800) が指導者となってインテリ女性たちの夕べの会合がしばしば開かれ、主として文学や芸術に関する高級な議論が交わされていた。その中でベンジャミン・ステイリングフリートなる紳士が、普通一般の黒絹の靴下ではなくて青色のウールの靴下をはいていて、人目を引いた。やがてこれがその種の会合を持つインテリ女性たちにあてはめられるようになったという。インテリ女性t地に与えられたさげすみの言葉であった。日本では「青鞥派」と訳され、平塚らいてう (1886-1971) らは自分たちの機関誌を『青鞥』と名付けることによって、むしろ女性の知的

- 独立宣言という肯定的な意味合いを強調している。
- (20) 河村貞枝/今井けい『イギリス近現代史研究入門』, 青木書店, 2006年。
- (21) ホラス・ウォルポール (Walpole, Horace 1717-97), イギリスの作家。代表作に *The Castle of Otranto* (1764) がある。
- (22) ジョン・スチュアート・ミル (Mill, John Stuart 1806-73), 功利主義を代表する英国の哲学者, 論理学者, 経済学者。 *A System of Logic* (1873), *On Liberty* (1859), *Utilitarianism* (1861), *Autobiography* (1873), ミルとテイラーの共著『女性の隷従』 (*Subjection of Women*, London: Longmans, 1869)
- (23) ハリエット・テイラー (Taylor, Harriet), 1851年に「女性参政権」 (Enfranchisement) という論文を発表。
- (24) 川本静子『ガヴァネス (女家庭教師) ——ヴィクトリア時代の〈余った女〉たち——』中公新書, 1994。
- (25) 「家庭の天使」コヴェントリ・パットモア作の長編詩で, 家庭を愛し夫に仕える性的に無垢な女性を歌った詩であり, 1854～63年に出版された。
- (26) バンクス夫妻 (The Banks.) の著書 *Banks, J.A. and Olive Banks. Feminism and Family Planning in Victorian England*. New York: Schocken Books, 1964に拠る。また, 河村貞枝/今井けい『イギリス近現代女性史研究入門』青木書店, 2006, p.53を参照のこと。
- (27) 『シャーロック・ホームズ大事典』東京堂出版 (2001) によると, 1880年のイギリス貨幣1ポンドの価値は2000年頃の日本の円に換算して約24000円に相当する。
- (28) シャーロット・ブロンテ (Brontë, Charlotte 1816-55), イギリスの小説家・詩人であり, 代表作は *Jane Eyre* である。Emily と Anne の姉である。
- (29) コナン・ドイル (Sir Arthur Conan Doyle 1859-1930), 『緋色の研究』 (1887) はシャーロック・ホームズが初めて登場した作品。
- (30) ヘンリー・ジェイムズ (James, Henry 1843-1916), アメリカの小説家で晩年イギリスに帰化した。代表作に *Daisy Miller* (1879) や *The Ambassadors* 等がある。
- (31) 清教徒: Puritans. ピューリタンの訳語。エリザベス一世の宗教解決に不満を抱き, より徹底した宗教改革を要求した英国教会内の人々の総称。英語の purify (清める, 純粋にする) が語源。実際にこの語が使用され始めたのは, 1563年頃からで, 当初は中世のカタリ派 (清めを意味するギリシャ語に由来) のような異端であると侮蔑するために使用された。大貫隆, 名取四郎, 宮本久雄, 百瀬文晃編集『岩波キリスト教辞典』(岩波書店, 2002年), 632頁。

**エリザベス一世の宗教改革：カトリックとプロテスタントの両極端を排するもので、1559年の首長令（国王至上法）と統一令を2本柱とする宗教改革によって、「国法によって制定された英国教会」として英国宗教改革を恒常的な形で定着させた。（大貫隆，名取四郎，宮本久雄，百瀬文晃編集『岩波キリスト教辞典』（岩波書店，2002年），157頁）。

**英国国教会：ヘンリー8世は，王妃キャサリンとの結婚解消を強行クレメンツ7世に願い出るが認められず，当時の英国における宗教改革的気運の中で1534年に首長令を制定，自らを英国教会の，地上における唯一なる至上の長として，ローマ教皇から独立した国民教会を確立した。これが英国宗教改革の始まりとなった。（同上，1029頁）。

- (32) イルクストン：Ilkeston. イングランド中北部のダービシャー州の町。
- (33) エディプス・コンプレックス：Oedipus complex. 精神分析の理論で，異性の親に対して子供が抱く近親相姦の幻想をいう。S.フロイトによれば，3～5歳にかけてこの段階を通過する。女性のエディプス・コンプレックスをエレクトラ・コンプレックスと呼ぶこともある。語源は，ギリシア神話や文学に登場するオイディプス王から来ている。彼は古代ギリシアの都市国家テーバイの王ラーイオスとその妻イスカリオテの息子で，知らずに父親を殺し，母親と結婚する。母との間に4人の娘を儲けるがその1人がアンティゴネーである。
- (34) ジェシー・チェインバーズ（Chambers, Jessie 1887-1944）
- (35) イギリスの女性参政権：1918年に21歳以上の男性と，戸主及び戸主の妻である30歳以上の女性が議会議員選挙権及び被選挙権を獲得する。しかし，この年行われた総選挙において，女性17名が出馬したが女性議員は出現しなかった。1928年に男女平等普通選挙権が実現した。（河村貞枝，今井けい著『イギリス近現代女性史研究入門』（青木書店，2006年）。なお，ロレンスのイギリスにおける女性参政権運動との関わりについては，Wicks, Isumi. “D. H. Lawrence and Women’s Suffrage: The Roles of Two Suffragettes, B. Jennings and D. Marsden, in His Writing,” *New Directions* No.27（名古屋工業大学共通教育・英語），2009年3月。を参考にした。ロレンスは女性参政権運動に関して，賛成したり批判したりと矛盾した意見を述べている。
- (36) イギリスの婦人参政権運動の政治的指導者。既婚夫人の財産権保障に努力。1903年夫人政治社会同盟を設立。戦闘的な婦人参政権運動を行い投獄された。『丸善エンサイクロペディア大百科』（丸善エンサイクロペディア大百科編集委員会，平成7年）。丸善株式会社。
- (37) Lawrence, D.H. *The Letters of D.H. Lawrence Vol.I*. The Cambridge

- Edition. Cambridge: Cambridge University Press. 1979, p.103.
- (38) エドワード・ガーネット (Edward Garnett, 1868-1937). 1900年, ダックワース社に入社。ロレンスはガーネットに認められて, ダックワース社から「越境者」, 『息子と恋人』を出版した。
- (39) ロレンスがエドワード・ガーネットへあてた手紙: *The Letters of D.H. Lawrence Vol. II.* (eds.) George J. Zytaruk & James T. Boulton (Cambridge University Press, 1981), p. 165.
- (40) アーネスト・ウィークリー (Weekly, Ernest 1865-1954). 英国の英語学者, 語源学者。 *An Etymological Dictionary of Modern English* (1921).
- (41) フリーダ・ロレンス (Lawrence, Emma Maria Frieda 1879-1956). ドイツ人で, 母は下級貴族であり父は男爵であった。アーネスト・ウィークリー教授と19歳で結婚したが, 1912年5月にロレンスと出会って駆け落ちをし, 1914年7月14日に結婚した。
- (42) 非国教会会衆派: Congregationalists. 個々の地方協会の独立と自治を基本とする組織形態を採る諸教会の総称。
- (43) Lawrence, D.H. *The Trespasser*. The Cambridge Edition. Cambridge University Press. 1981 (略号T) 原文引用の下に付けた訳はすべて拙訳である。
- (44) Lawrence, D.H. *Women in Love* The Cambridge Edition. Cambridge University Press. 1987 (略号WL)
- (45) Lawrence, D.H. *The Virgin and the Gipsy in The Great Short Novels and Stories of D.H. Lawrence*. London: Robinson Publishing, 1989. (略号GSNSL)
- (46) マグナ・メイタ: 「大いなる母」は, 本来「生命の贈与者, 保護者であると同時に, 掌握者 (container) — 生み出した声明を固く握りしめ, 自分のもとに引き戻すものでもある」 (Erich Neumann, *The Great Mother*, Trans. Ralph Manheim, [Princeton: Princeton U.P. 1983], p.45).
- (47) イギリスの貴族制度について: 男性貴族は上から王族公爵 (royal duke), 公爵 (duke), 侯爵 (marquess), 伯爵 (earl), 子爵 (viscount), 男爵 (baron) となり, 女性貴族は女伯爵 (countess), 女男爵 (baroness) がある。准男爵は法律上は貴族ではないが, 実質上は「貴族」に等しい。
- (48) パンの神: Pan. ギリシア神話で, 森, 原, 牧羊などの神。ヤギの角, 耳, 脚を有し, 葦笛を吹く。ローマ神話のFaunus (ファウヌス) に当たる。ローマの古い森の神で, 動物・農作物の守護神。
- (49) イギリスのわいせつ文書法改正: 1959年。
1857年: わいせつ物出版取締法 (俗称キャンベル脚法) 成立。

1861年：人身に対する犯罪法が成立（ソドミーには終身禁固刑——1956年廃止）。

1889年：女性の参政権運動連盟結成。

1895年：オスカー・ワイルド裁判。（1897年釈放）。

1905年：パンクハースト女史の参政権運動開始。

1959年：猥褻物出版取締法改正（猥褻か否かの判断は全体の観点からなされるように改正された）。

1960年：『チャタレー卿夫人の恋人』訴訟勝訴。

（出水純子「世紀末から二十世紀への性意識の変遷——『チャタレー卿夫人の恋人』の時代背景」（『ロレンス研究——『チャタレー卿夫人の恋人』』（朝日出版社，1998年），11～15頁）。

- (50) *Lady Chatterley's Lover & A Propos of Lady Chatterley's Lover*. The Cambridge Edition. Cambridge: Cambridge University Press, 1993. (略号 LCL)
- (51) Lawrence, D.H. *The Woman Who Rode Away in The Great Short Novels and Stories of D.H. Lawrence*. London: Robinson Publishing, 1989. (略号 GSNS)